

『 今、生きて働かれるイエス様 』

使徒の働き 25章 13～27節

◆ 登場人物

【13節】前回の裁判から数日経って、総督フェストの元にアグリッパ王が訪れます。アグリッパ王とはヘロデ・アグリッパ二世のことです。使徒の働き12章で登場するアグリッパ一世の息子であり、イエス様がベツレヘムで生まれたころ在位していたヘロデ大王の曾孫にあたります。父アグリッパ一世が死去したとき、彼は若干17歳の少年でした。そのためユダヤはローマ総督直轄となり、彼には大祭司の任命権だけ与えられ、ユダヤから離れた小国カルキスの王位に着きます。約10年経って後、ようやくユダヤ地方の一部を統治することとなり、徐々にではありますが統治権を拡大させて行きます。彼はローマ政府寄りの王でした。実際、王とは名ばかりの地方の領主に過ぎないアグリッパ二世でしたが、帝国の高官との関係にはより気を使っていたでしょう。カイザリヤに駐屯する総督フェストに挨拶【敬意を表するために】訪れたわけです。【ベルニケ】とはアグリッパ二世の妹です。

◆ 生きておられるイエス様

【14節】総督フェストはアグリッパ二世が表敬訪問のために訪れてきたことを一つの好機と捉えました。なぜならパウロの扱いに困っていたからです。もはやローマ皇帝への上訴を宣言したパウロをローマへと移送する正式な理屈が見当たらないからです。ユダヤ人たちは訴えを起こしても立証は全く出来ませんでした。この解決困難な訴訟について、アグリッパ二世に相談が出来るチャンス・好機と考えました。早速、総督はこれまでの経緯と詳細をアグリッパ王に説明しています。【15-16節】ここは先週の箇所1-5節と合致します。フェストがエルサレムを訪問した際にユダヤ教指導者たちは、パウロ殺害の意に燃えて、パウロをエルサレムに呼び寄せてくれるよう懇願しています。その真意は知らずともフェストはある意味で公正な判断の元に、もし再審請求したければ、あなたがたの代表者たちがカイザリヤに来て改めて訴えるべきであると発言しました。【17-19節】は先週の箇所6-8節と合致するところです。総督フェストがエルサレムからカイザリヤに戻るところに同行してきたユダヤ教代表団は、カイザリヤ到着後直ぐに再審請求し、翌日には再審が行われました。訴えを起こしたユダヤ人たちは色々と罪状を申し立てるものの何一つ立証できず、そこにパウロの犯罪を正式に見出すことは出来ません。ただ一つ言えることは、彼らユダヤ人のユダヤ教の云わば宗教的な問題に過ぎないのではないかと、フェストはアグリッパ王に相談しました。そして【20-21節】。これは先週の箇所v9-12に合致するところですが、一部、齟齬があります。フェストの隠蔽です。20節で【このような問題をどう調べたらよいか、私には見当がつかないので】エルサレムで再度裁判を行おうとパウロに尋ねたとアグリッパ王に説明していますが、実際は【ユダヤ人の歓心を買おうとし(9節)】でパウロにエルサレム行きの話を持ちかけていたのでした。

さて、ここで注目したいことがあります。もう一度【19節】。フェストは「この訴訟は彼らユダヤ人間の言い争いであり、彼らユダヤ教の問題である」と説明しました。この見解はある意味で芯を食っています。それ故にローマ法では判決を下すことが出来ないからフェストは困っているわけです。そして最も興味深いことは、総督にとってこの問題は些細なことであり、まるで無関心だけれども、被告人パウロの弁明で最も重要な事柄を総督は捉えていたということです。【また、死んでしまったイエスという者のことで、そのイ

エスが生きているとパウロは主張している】と。先週の箇所におけるパウロの弁明は8節のみです。しかし実際、この裁判においてパウロはいつもの通り、いつもと同じように復活の主イエス様を証ししていたのです。あのナザレのイエスこそ旧約聖書の預言に従って十字架で死なれ、復活したことを証ししたのです。十字架による罪の赦し、復活によって義と認められていのちが与えられていることを証ししたのです。そして救い主イエス様は復活して、今も生きておられる救い主であることを証ししたのです。総督フェストは無関心であっても、パウロの弁明(証し)の主張点を捉えていたことが良く分かります。

◆ 生きて働かれるイエス様

総督フェストの説明を聞いたアグリッパ王は関心を抱きます。【22節】これは総督にとって更なる好機となりました。王にパウロの話しを聞いてもらうことにより、皇帝の元にパウロを送るための正当な罪状を見出して貰えるのではないかと考えたわけです。そこで総督は、アグリッパ王の前でパウロが弁明できる会見の場を設けることにしました。【23節】ここからアグリッパ王とパウロの会見が始まります。アグリッパ二世とベルニケは【大いに威儀を整えて到着】します。“威儀”という言葉が用いられていることから、恐らく二人は荘厳さを象徴する紫布の衣をまとって、額には王位を表す金色の輪をはめていたことでしょう。【千人隊長や市の首脳者たちにつき添われて】会見の場である講堂に入場しています。この会見は総督フェストの権威の下に開催され、ここに集っているのはほとんどがローマ政府関係者でしょう。アグリッパ二世とベルニケは来賓です。二人は王家の代表らしい格好でこの場所に入ってきたわけです。パウロの弁明に先立ち、アグリッパ王と聴衆の前で総督フェストの開会の言葉が述べられています。フェストはこの会見の意味と目的を最初に説明しました。【24-27節】この会見の目的は、「皇帝に上訴したパウロを、皇帝の元に送り届ける際の正式な訴状が必要であるから、アグリッパ王にはパウロの話しを聞いた上で訴状作りを助けてもらいたい」ということです。上訴申立書を記すための資料となる事柄を見つけ出すため、アグリッパ王は利用されているということでしょう。

さて、私たちが注目したい事柄は、やはり総督フェストの発言です。【25節】総督フェストは、はっきりと明言しました。【彼は死に当たることは何一つしていません】と。事実上の無罪宣言です。ローマ法に基づいてパウロは無罪であることを宣言しているのです。ではなぜ、パウロを無罪放免、釈放しないのでしょうか…。それはパウロが皇帝に上訴したからです。既に観てきたように、フェストがユダヤ人の歓心を買おうとしてパウロをエルサレムに差し戻そうと画策したとき、パウロは皇帝カイザルへの上訴を宣言して、ローマへと送られることが決定したのです。無罪に関わらず釈放ではなくローマ行きとなるこの経緯こそ、“今、生きておられるイエス様”が“今、生きて働いておられる”ということに他なりません。【エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない】と約束されたイエス様が、今、生きて働いてパウロをローマへと導いてくださっていることが今朝のテキストで明らかに強調されているのです。

◆ まとめ・お勧め

主が私たちに与える最善は、私たちの物差しで計ることはできません。時に、悲しみや苦しみ、痛みや病い、私たちが涙するような境遇を通らせることがあります。しかしそのような状況でこそ、私たちが覚えるべきことがあります。今も生きて働かれる主に私たちが目を向け、常に信頼して信仰のうちに歩むことが出来るようにと、イエス様は願っておられるのではないのでしょうか。今、もし望んでいない状況の中に私たちがいるとするならば、「今、生きて働かれるイエス様」に信頼して歩む時なのです。私たちを罪から救うために十字架で死なれ復活してくださった主は、今、生きて働かれる救い主です。私たちが祈り求める時、生きて働かれるイエス様は素晴らしいわざを見せてくださいます。